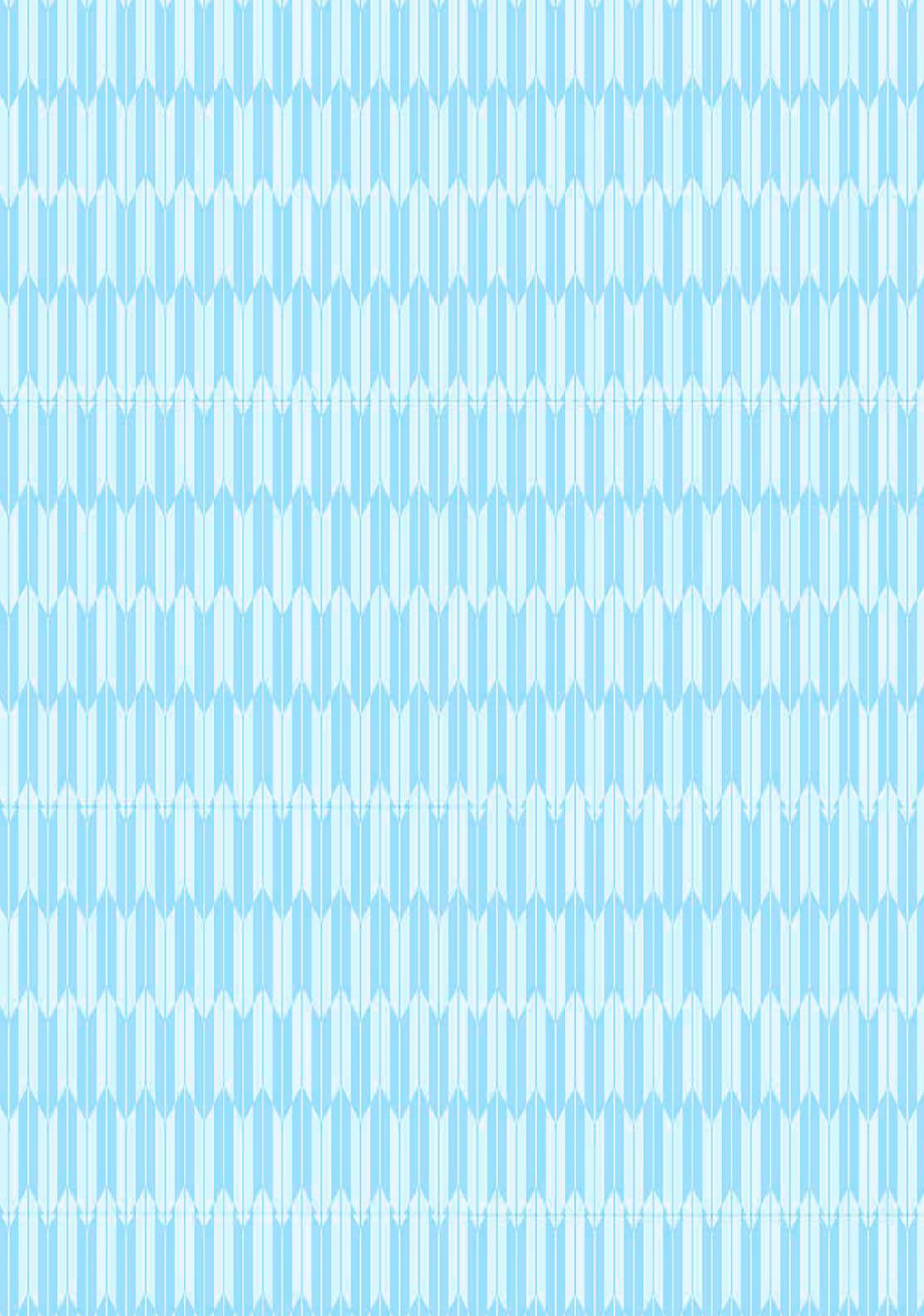


あさ
8

2025



撮影：墨沱



鳴
蜩
鼈
蛇



羽拔鷄怒れり彼に競べられ
竹僕

あそ

八月集

坐・誹

佐藤

竹僊

廢屋の閉めきらぬ窗花吹雪

青芝や松より出づる松の影

丁寧に水に偽たるメダカの子

青龍の腹の生白梅雨あがる



夏の木になつてしまへり古祠

メダカ見てゐるうちシャツ生乾き

太陽盡く數刻前の熱さかな

白扇に字のあるごとし大の里

この蟲も病も名を得冷奴

霧の人乗せたるあと霧の音

後の月この世に比丘尼橋

二ふう
三みい



朝の蓮池

篠田純子

願はくは蓮の玉にて首飾らむ

蓮の風ほしいまま浴ぶ朝の池

透し見る蓮の葉脈手の血筋

浮いてきて亀吾を見つむ蓮の池

鯉の稚魚かたまり泳ぐ蓮の池

花氷はや解けだしぬ漬物屋



必ず帰る

篠田大佳

あぢさゐやカメラに見えぬ色がある

梅雨の傘忘れしままに置いてあり

梅霖や必ず帰る傘なるよ

長嶋の雨の上がれば薄暑なり

漢語なる老婆の叱言梅雨曇

溽暑地下鉄少年のへたりこむ

メロンソーダ悪口あかんもう聞いたで

夏やカフエ赤子叫ぶもジャズの内

泡盛の古酒祖靈と酌み交はす



雜詠

須賀敏子

梅雨晴間下校の子等はスキップで

金柑の白く小さな花咲けり

今日の空山紫陽花の花の色

蜜豆を前に静かな二人かな

ジユースよりドリンク剤に手が伸びる

空梅雨やそろそろ降つてもらいたい



梅雨

長崎桂子

桜並木や花終手入れする

電話して草花の名を聞く梅雨に
父祖の地の夏六地蔵様に合掌

脇道にびつしりきれい虞美人草

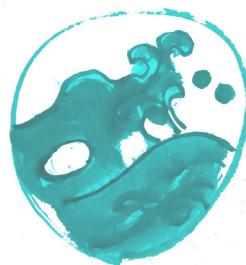
日傘さす日除ぼうしやばら香る

高原は香りみちみち力ミモール

笹百合や斜面に淡いももいろゆかし

つづく梅雨を慰む琴演奏会

枇杷むいて笑顔を交し思ひ切り



六月

森 なほ子

知り合ひに年下増えて独活の花

青梅の一粒地面明るうす

葉桜や姫出歩く時間帯

残雪の山風評は消え去らず

自衛隊会津若松支部に夏

揺れ騒ぐ新樹に山の動きけり

乗り換への束の間京の夏匂ふ

待ち疲れ鹿に慰み国宝展



沖縄忌

学童の帰路賑やかや枇杷小粒

右往左往雨後の雀と四十雀

梅雨ですね話題見つかる美容院

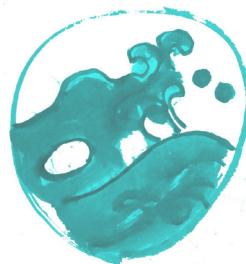
一人居の時の記念日ちぎれ雲

リモコンに遊ぶ文鳥羽抜鳥

新じやがや根氣で仕上ぐ煮転がし

朝ドラに玄孫を観る独歩の忌

反戦よ平和よ海よ沖縄忌



妹

七郎衛門吉保

賑やかな妹を送るや金銀花

賑やかに妹を送るや金銀花

妹逝きて天上世界の早苗かな

早苗田に元気な水路歓喜あり

我が身にも代田の頃のありにけり

古古古米植田のとなり休耕田

低山に霧雲の帶走り梅雨

白い腹空を捌きて夏燕



五月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

こぶし笑く四歳までは無口な子

佐藤竹僕

子どもの成長は早く、突然性格が変わることも起るというのもよくわかります。五歳になつた途端に言葉が増えるというのは、想像してみると、脳が発達した、環境が変わつた、仲良しの友達ができた、内省を経て明るく振る舞おうと決意したなど、いろいろ思いつきます。こぶし咲くの取り合わせに、言葉にできない子どもの内省を思います。（大佳）

送電線のたわみに春のどつかりと

佐藤竹僕

この句は、句会で、皆さんに大好評でした。あの重たげな送電線に、春が乗つかつていて、送電線が揺れているのではなく、春が、居座つている感じです。難しい言葉を使わず、その状況が、素直に詠まれている。それが、皆さんの共感を得たのでしょうか。「たわみ」と「どつかり」という言葉が、しっかりと連想できました。（典子）

花冷えや禿の末は遊女とや

森なほ子

禿は、遊女に従える見習いの少女です。華やかな世界にいて、今はいとけない娘でも、将来は

遊女として過酷な環境の中に晒されるという先行きの不安を、花冷えの季語で表現しています。遊郭は、大河ドラマ「べらぼう」の舞台となつていて、当時の風俗に対する関心は高くなっています。かつての遊女たちは安らかになつたでしょうか。（大佳）

まんさくの花散らしたやうにちらし寿司

森なほ子

見立ての句は格は高くないかもしないが、気にすることはない。楽しむのが大切。まんさくの花は花らしくない花だ。野の草花でも虫を呼ぼうと目いつぱいはひをして咲く。ところがまんさくは虫もとまどふ形をして咲く。その花弁がちらし寿司に散らしたやうに乗つてゐる。なかなか楽しく詠まれてゐる。他には何が乗つてゐるのだらう。「鮓」は夏の季語として扱ふ。ちらし寿司は好物。おはぎ・おにぎり・筍ごはんなどはプロが作るより、家庭で作りみんなでワイワイ言ひながら食べるのがいい。（喜孝）

鞆 やあの日あの時多過ぎる

赤座典子

ぶらんこに揺れながら、昔のことを思い出している作者です。「あの日あの時」は過去の記憶で、後悔を含んでいるように思います。ぶらんこの往復運動によつて後悔が頭にこびりついて、なかなか離れてくれないイメージを持ちます。そして、ぶらんこから降りた時に、すつきりと後悔が拭い去れるような予感もします。（大佳）

春 シ ョ ー ル 少 し 明 る く 髪 の 色

赤座 典子

当世老若男女を問はず黒髪を、白髪を染めて楽しんでゐる。髪型ひとつ決まらずイライラして約束の時間に間に合はぬこともある。さういへば急に思ひ出したことがある。父の葬儀を何とか終へ、だうした風の吹き回しか床屋でアイパーをかけてしまつた。なぜそのやうなことをしたのか今になつては謎である。掲句の典子さんは素直に春のよろこびに浸つてをられる。春を謡歌するに歳は関係ないが、「少し」といふくだりに作者が見えおもしろい。（喜孝）

祈れども野火煌々と山をのむ

秋川 泉

野焼きの火が延焼し、山火事になつてしまふなど、様々な原因で、世界各地に、自然発火が起こつています。消火までに何日也要し、多くの人々が、避難を強いられました。幾晩も燃え続ける焰を、ニュースで見ながら、本当に祈ることしか出来ませんでした。

あらゆる分野で、何が起きるか分からぬ世に、なつてしましました。子供たちの将来が心配です。祈るばかりです。（典子）

夕闇に淡雪にぬれ野の佛

秋川 泉

夕闇に濡れた佛、そして淡雪に濡れた佛。この野佛を深く心にとどめられた。しばらく立ち止

まられたことだらう。布団に横になり目をつぶる。夜の闇の中で変らず立つてゐる野佛が見えてくる。と、読者を作者の世界にいざなふ作品。それは「夕闇に淡雪に」の一度の「に」の効果である。高みに読者をいざなふ効果がここにはある。「仏」でなく「佛」であることにこの野佛にたいする泉さんの感情を察することができる。(喜孝)

堅 雪 の 壁 の 高 さ や 赤 信 号

七郎衛門吉保

『角川俳句大歳時記 春』に、「春の暖かさで、解けかかった雪が、夜の寒さなどで、堅く凍りついた状態をいう」とある。例句として、踏みしめる雪の堅さに触れているが、作者は、高く壁となつた、堅雪を詠んでいる。雪国で見られる、壁の高さは、優に人の身長を超える、道沿いでは、人家を隠すほどである。

作者は、「赤信号」を高い位置に存在するとか、危険を知らせる働きをするとか、警告の意味で用いていると思われる。作者ならではの発想である。(典子)

桃 の 花 一 枝 そろばん玉 の ご と

七郎衛門吉保

「見立て」とは、あるものを別のものに例へたり、置き換へて表現する手法や考へ方のことです。よく「如く俳句」ともいふ。掲句は桃の花枝を算盤に見立てた。見立てに使ふものは大方詠者の身邊にある物に例へる。掲句の「そろばん」は若者の発想の中には無いかもしれないが、わたし

は何回も肯くことができる。形状が似ているといふ発見の楽しさから始まり、カシオの電卓が拵まるまでは家の中に必ず算盤は備へてゐたものだ。見立てのおもしろさの一つに「何に」見立てたかといふ見立てた「事」や「物」にもあるやうだ。（喜孝）

風光る記事の見出しの七五調

七郎衛門吉保

七郎衛門吉保さんは世情の出来事を残さなければと俳句を作るといふ。失礼だが大方まづい。吉保さんはそんなことは恐れない。一本筋金が入つてゐる。その余得であらうか、力みが抜けた隙間に掲句が出来たやうだ。記事の見出し、キャッチフレーズほど右を向いて言つてゐるのか、左を向いて言つてゐるのか判然としない。ただ読んでもらうための言葉が並ぶ。それに騙されて読んでしまふ私もわたしだが。吉保さんは見出しがニュースの内容より「七五調」だと気づきおもしろがつてゐる。きっと内容も「風光る」にふさはしいニュースだとおもへる。吉保さんはいまに人を喰らせる時事俳句を詠まれることであらう。それを見逃さぬやうアンテナの掃除をしやう。（喜孝）

春深し先代の名のクローネ犬

篠田純子

おそらく、ニュースを見て作った句であると思いますが、亡くなつた愛犬のクローンを作つて、同じ名前で飼育する飼い主のニュースが出てきました。春深しという季語からは、季節が巡つて、

生命が躍動する予兆を感じます。未来のことはわからないし、命を弄んでいるという批判も出るでしょう。それでも、愛するものの死を乗り越える一つの形として、作者は飼い主に寄り添つているように思います。（大佳）

花の雨佃小橋の賀

篠田純子

季語に凭れ、地名に寄り添ひ、そして言葉を愛し一句が詠まれてゐる。ここにあるすべての言葉を愛し信じてゐる。他者の言などこの句には不要である。わたしも昔日人の案内で佃小橋に立つたことがある。今ネットで見ると佃小橋から見える空にはビルが林立してゐる。そのやうなことには掲句は目をつぶつてゐる。これは作者の意志である。（喜孝）

旅の子は漕ぐ鞆轆をめいつぱい

篠田大佳

旅先で、久しぶりにブランコを見かけ、昔とった杵柄で、思いきり漕いでみます。高い青空が近付き、戻るときの、スリリングな感覚も思い出します。その躍动感は、忘れられない思い出となることでしょう。「めいっぱい」が素敵に効いています。（典子）

墨堤にうたふ彼岸のさくらかな

篠田大佳

リハビリと称して軽運動をしに週一回迎車に乗つて出かける。一、三人が一組になつてまづ好み

の飲み物を注文していただく。同席の人は決まってゐない。先日隣り合はせた男性は私より一、三歳年上であった。手術を何度も経験なされてゐると聞く。麻酔で寝て（？）ゐた時、不思議な夢を見たといふ。きれいな流れの小川。あしもとも澄んだ水、田んぼのやうな気がした。向ふ岸には花が咲きその向かうには懐かしい顔々がニコニコと並んでゐたといふ。家に戻つて家人にその話をしたら「それ三途の川と違ふ」といはれたと話してくれた。

掲句を読んでなぜかこの話を思ひ出してしまつた。「彼岸」といふ言葉のマジックに掛かつたのだらうか。（喜孝）

まあまあの人生なりやミモザの日

須賀敏子

物事の満足度というのは塩梅が難しく、満足しすぎると飽きてしまうし、かといって、不満が多ければ反発してしまいます。不満もあるが、楽しいこともあつたくらいが、例えば学校生活などを振り返ると、ちょうど良かつたなと思えます。

作者は人生を振り返っています。ミモザの日は三月八日を女性の日として制定されたイタリアの祝日だそうです。女性として生きるのは大変だったけど、女性に感謝する日があれば、まあまあ良かったと言えるのではないかと振り返つているようです。（大佳）

侘助の花の中なる目白かな

須賀敏子

蝶や昆虫は花が好きだが、鳥も負けずに花を好む。あの大型の鳩も桜の花を抓んでゐる。特にメジロやヒヨドリが目に付く。メジロといふ鳥名通り目の周りを白く縁取られてみて目立つ。そのメジロがいまは佐助の花に埋もれていそがしい。メジロにとつては極楽である。

押し出されまた潜りこむ眼白かな

吉田 輝

(喜孝)

はや開花さむさいとはぬさくら花

長崎桂子

奈良を訪れた作者は、早くも咲いている桜を見つけました。こんなに寒いのにもう開いている桜、咲き始めは初々しく、一段と美しいです。作者は、その美しさと逞しさに会えた、喜びから励ましを貰っています。「寒さいとはぬ」という表現に、作者は、力強さを込めています。(典子)

囁し立て草餅つくる奈良の春

長崎桂子

奈良の草餅は有名で期間限定で売られると知つた。列んで買ふものらしい。中谷堂の高速餅つきは見てみると恐ろしくなる。餅つきの観衆でもありお客様でもある人々の声も混ざり当に奈良の春である。(喜孝)



季語あれこれ 「ビール・打水・ほか」

警戒級の暑さ。暑さ凌ぐのなるかはわかりませんが、今月は少しでも涼しくと願ひ季語を選びました。暑さを凌ぐ料理はそれぞれの好みがありますが、「まあ、とりあへず」。

気に入りのグラスにそぞぐビールと私

芝宮須磨子

地麦酒の夜のうらぎり蟹鳥賊

森 理和

溢れさせビール飲む夫夢の中

芝宮須磨子

過労死などあり得ぬ男生ビール

篠田純子

すつかりこけ顔へ夏越の黒麥酒

堀内一郎

天心に月ころがしてビール抜く

渡邊友七

ミヤンマーへ歩いて着きしビール飲む

佐藤喜孝

南国のビールグラスの大きさよ

赤座典子

信子から注いで貰ひしビールの泡

堀内一郎

春の川ふじつぼ付いたビール瓶

篠田純子

五十年相性あはずビールの泡

堀内一郎

缶ビール三つ漬して友帰る

鎌倉喜久恵

郎女に植疱瘡が生ビール

佐藤喜孝

倍働けと言つてゐた父生ビール

篠田純子

ふるさとに絆うれしくビール酌む

芝宮須磨子

無器用に生きて器用にビール飲む

遠藤 実

切れ味かはた喉越しか缶ビール

木村茂登子

みんなで泣いてビールの泡のほろ苦き

堀内一郎

チエコよりのアロマホップの麦酒試飲

佐藤恭子

麦酒試飲ほろ酔のまま帰路のバス

森 理和

無機質のビール工場百日紅

佐藤恭子

時に吹く微風麦酒の歩をはやむ

佐藤恭子

砂利を踏む麦酒の酔が頸にも

佐藤恭子

やはらかき泡に味あり新ビール

須賀敏子

大国魂神社奉納薦麦酒

佐藤恭子

秘仏觀てご馳走食べて生ビール

篠田純子

けふはビール旨いぞと云ふ日のビール

篠田純子

試飲するビール工場春の雪

須賀敏子

銀盃をキンキンにして麦酒の夜

井上石動

イカリワク怒り湧く度ビール飲む

夕立を眺めるビール飲み乍ら

ネクタイを緩めビールの一気飲み

漱石ビール安丘衛煽りし酒屋にて

爽やかや昼の麦酒の白き泡

ビール飲んだ顔して銀座どまん中

軟骨のつくねにビールス貰ふ暮

墓参り缶ビール添へ花を添へ

万緑や茶店の提灯ビール紋

殿塚の供物ビールとウキスキー

納涼船力オス隣のビールひつ掛る

テレビから妻の持唄缶ビール

ハッピーアワーは道後ビールとじやこ天と

階段に腰掛けまづは缶ビール

ゴーゴーガールを直視できない生麦酒

キンキンに冷やしましたよ缶ビール

生ビール猫舌母娘のもんじや焼き

篠田純子
篠田大佳
篠田大佳

打目打水をしてお味噌汁
打水や留守居の犬に振るまはむ
打水をよこぎるこころがまへかな
打水を過るまでわれ影であり

芝 尚子
山莊慶子
佐藤喜孝



打水の効果は如何ほどなのだらうかとおもふが、
視覚的には本当に涼しくなる。何処で見てゐたのか
すぐにトンボが下りてきて産卵をするのを見ると悲
しくなる。

打水のバケツに浮かぶ葉くづかな	斎藤裕子	金魚への朝のあいさつ今日も又	早崎泰江
打水や江戸の香の立つ佃島	篠田純子	秋めきて金魚の尾鰭ゆつたりと	早崎泰江
打水の露地涉りくる銅鑼五点	東亜未	エサキンと呼ばれて金魚赤かりし	森 理和
打水が坂道を行く蛇になる	篠田純子	深川を辰巳と呼べり金魚玉	後藤志づ
打水する仙台平の見えかくれ	篠田純子	夜の秋小鳥と金魚ひさぐ店	竹内弘子
打水すチカチカ交信はじまり	佐藤竹僕	日向水せつせと溜める金魚のため	竹内弘子
打ち水が日課隣家の爺ありき	森なほ子	下駄箱の金魚玉越後獅子の唄	竹内弘子
打ち水を子らに頼めばびよ濡れに	森なほ子	金魚鉢女にもある正念場	田中藤穂
置いてきし打ち水日向水の日々	森なほ子	八階の売場へ金魚昇りゆく	竹内弘子
水を打つバケツ小さし店の幅	渡邊友七	大甕に夜店の金魚放ちけり	竹内弘子
ふるさとを語る珊瑚や金魚鉢	赤座典子	金魚玉はなれて寄つて同母妹なし	竹内弘子
人待つや金魚一尾は淋しからむ	渡邊友七	強震のありし五階の金魚玉	竹内弘子
骨董市法外な値の金魚鉢	赤座典子	思ひ立つ金魚の一尾矢のごとく	森 理和
金魚壳バッテンボーのリフレイン	赤座典子	長生きの金魚跳ねざま鯉に似し	早崎泰江
小さくちさくまるめたる餌金魚釣	竹内弘子	金魚にも夜の挨拶ライト消す	早崎泰江
	長崎桂子	宵祭金魚すばやく舵かへる	長崎桂子
	早崎泰江	きのふより水のつめたき金魚鉢	早崎泰江
	竹内弘子	小さくちさくまるめたる餌金魚釣	竹内弘子

金魚沈む集中豪雨來たりけり

渡邊友七

金魚死す水槽の藻のゆれてゐる

早崎泰江

追ひかけて追ひかけられて金魚池

森 理和

平穏な一尾となりし金魚かな

早崎泰江

水槽の広々とせり金魚老ゆ

早崎泰江

縁日の帰り重たき金魚二尾

森 理和

手を伝ふ水は逃さず金魚鉢

堀内一郎

金魚行く波紋の影に速さあり

齊藤裕子

月曜はいつも寂しき金魚玉

定梶じよう

大甕を叩いて金魚の名を呼べり

竹内弘子

運不運金魚すくひをはじまりに

堀内一郎

俳諧にをとこの始心金魚玉

竹内弘子

そば処青藻に金魚泳がせて

田中藤穂

禅寺の池の金魚の肥えてをり

篠田純子

金魚を繁殖させて青年恋もせず

篠田純子

金魚鉢置屋さんは根津育ち

田中藤穂

小説の結末に似て金魚玉

竹内弘子

いつときの雨の入日や金魚玉

井上石動

アガサ・クリスティの顔ぶれ金魚玉 竹内弘子

金魚玉ひとを隔つは隔てらる 竹内弘子

開戦日ときどき金魚よこに泳ぐ 定梶じよう

密室の金魚のひれのみどりいろ 篠田大佳

簾買ふメダカ金魚も数に入れ 大日向幸江

金魚壳アルプスの水飲んでをり 佐藤竹僊

極楽の極み金魚に餌が浮く 亀田虎童子

扇子、団扇は生活の中で活き活きとしてゐたが、

いつの間にやら消えていき、いまは小型の扇風機が

売れてゐる。ただの扇風機とは違ひ冷たい風が出て

くるさうだ。

いらだつてバス待つ真唇白扇子 芝宮須磨子

扇子に一句師の面影をひらくべく 堀内一郎

渡されし踊団扇を腰に差す 栢森定男

寝ぼけても団扇は必ず左手に 篠田大佳

抽出に夫の手跡の古扇 田中藤穂

膝団扇うそうそ時のひとり酒
愛うたがはぬ眸「湖畔」の団扇
団扇から生まるる昔ばなしかな
添寝する団扇のはたと止みにけり
房州団扇祖母の笑顔を思ひ出す
黄昏の一葦の水に団扇かな
団扇風子に送る母眼は遠く
いらだつてバス待つ真唇白扇子
何時のはど増える団扇を捨てきれず
扇子に一句師の面影をひらくべく
入り王にとんで香車や団扇風
受付に団扇の並ぶ接骨院
団扇風寝てばかりゐるおかあさん
御八つ時団扇の風を良しとして
晴れ女雨女居る丸団扇
スマホ程小さき団扇の風よろし
求めたるヴェニスの扇白レース
団扇にて曲舞の所作信長忌

佐藤恭子
長嶋桂子
佐藤恭子
斎藤裕子
森 理和
佐藤恭子
斎藤裕子
森なほ子
佐藤恭子
長嶋桂子
佐藤恭子
斎藤裕子
森 喜久恵
芝宮須磨子
須賀敏子
堀内一郎
佐藤恭子
須賀敏子
芝宮須磨子
須賀敏子
堀内一郎
佐藤恭子
須賀敏子
石森理和
石森理和
森なほ子
篠田純子
夏料理はからず祝ふバースデー
森山のりこ

「夏瘦せ」といふ食欲の失せる酷暑の中でもいろいろと考へられた食べ物がある。



定権じょう

渡団扇こんな所にさしはさみ
嵩の無き垂乳根団扇にて凌ぐ
絵扇のゆるりと波紋起こしけり
森なほ子

佐藤恭子

長嶋桂子
佐藤恭子
斎藤裕子
森 喜久恵
芝宮須磨子
須賀敏子
堀内一郎
佐藤恭子
須賀敏子
芝宮須磨子
須賀敏子
堀内一郎
佐藤恭子
須賀敏子
石森理和
石森理和
森なほ子
篠田純子
夏料理はからず祝ふバースデー
森山のりこ

白を食し翠のこりし夏れうり

佐藤喜孝

赤みずのとろろ汁めく夏料理

赤座典子

夏料理に留守居の人を誘ひけり

森なほ子

窓の雨ビル三階に夏料理

赤座典子

アミューズは茶葉の天ぷら夏料理

都築繁子

コロナ後の四人の集ひ夏料理

森なほ子

行李柳遠つ淡海の大鰻

赤座典子

かにかくに土用の鰻食うべけり

赤座典子

饒舌も土用鰻の味のうち

森山のりこ

信心のやうに鰻を称へけり

遠藤 実

旧木場に偲ぶ青春鰻喰ふ

田中藤穂

手にとつて迷ふてをりぬ鰻の日

阿部寒林

まあまだと神追つ払ひ鰻喰ふ

斎藤裕子

宝くじ売場の向かひ鰻焼く

定梶じよう

大鰻さばく手元のあやふけれ

秋川 泉

柳川に歌碑と鰻どっこ舟

篠田純子

鰻屋の柾の俎柾の下駄

篠田純子

俎に鰻断首の傷長し

篠田純子

どぶ川の雨鰻さらへと囁す子ら

秋川 泉

秋暑しなんと鰻の自販機ぞ

篠田純子

ベートーヴェンにコーダ冷奴におかか

佐藤喜久恵

魁皇が好きと言ふ母冷奴

佐藤喜孝

冷奴庭石すずろタづきぬ

佐藤喜孝

お節介ぐせがなほらず冷奴

佐藤喜孝

頭を支ふ首疲るるよ冷奴

佐藤喜孝

ひとつとやひとりやもめの冷奴

佐藤喜孝

老の日は無風に似たり冷奴

佐藤喜孝

テレビでは野茂が引退冷奴

佐藤喜孝

冷奴ホークとナイフのマナーとか

佐藤喜孝

冷奴二級酒愛し逝きし友

佐藤喜孝

冷奴もう登れない岳ばかり

須賀敏子

独裁もデモクラシーも冷奴

佐藤喜孝

冷奴酒のつまみと出す女将

大日向幸江

(佐藤喜孝)

あとがき

今月の表紙

東京・上野の不忍池に咲く蓮の花です。（撮影・不寛）

俳句と着物

今月は筆者の七郎衛門吉保さんが体調を崩され休稿といふことになりました。この暑さです。ご静養くださいませ。

後書を書く

七月の十五日、このあとがきを書いてゐる。「あをやぎ通信句会」の寸感を大佳さんに送りホツとしてゐるところ。大佳さんにお手数をおかけし申し訳なく思つてゐる。台風が近づいてゐる。雨がときどき強く降る。先日の雨で日高が数匹流失してしまつた。水があふれぬやう颶風への準備をした。日高もさうだが雨と風はわたしの行動を制限する。昨日は要介護認定士が来る日。散らかし放題の一部屋を何とか坐る空間を作り疲れた。今日は用足しに出かけるつもりだつたがやめた。明日はリハビリで出かけ雨の予報。手元不如意で郵便局に行かねばとおもふが。まあ何とかなるだら

う。それにしても要介護認定のために人差し指を立てた図を見せられ何指か訊かれる。今の季節はと問はれ間違へぬやう緊張する。すこし質問の方法に一考あつてもといつもおもふ。

「前月抄」のカット、今号は手花火と西瓜。今の若者でも夏のイメージといへば老人とあまりちがはぬやうだ。縁側のある家に住んだこともないエイマなのに、縁側が描かれてゐるのがおもしろい。順調に高校生活が始まつたらしい。（喜孝）

